入 塾 説 明 会

当塾と塾生たちの歩み

三つの教育方針

英語学習の指導方針

OC CLASSES

卒業生からのメッセージ

平 岡 塾

当塾と塾生たちの歩み

平岡塾は1965年4月に世田谷区芦花公園に創立されました。創立者平岡芳江は英語教育で名高い神戸女学院の出身で、そこで優れたネイティブ教師たち*から学んだ経験を活かして、筑駒に通う息子やその学友に英語を教え始めたのが平岡塾のそもそものはじまりです**。創立当初は 1 クラス 15 人に満たない小さな塾でしたが、東大受験生専用英語塾として東大合格率 95%以上を誇りました。

＊ そのなかには『アンクル・トムの小屋』の著者ストウ夫人の姪御さんもいらっしゃいました。

＊＊ 塾顧問として芳江を支えたのが実弟の金谷晴夫でした。金谷は元東大教授、基礎生物学研究所第二代所長、文化功労賞受賞、勲二等旭日重光賞受賞、日本人で二人目のフランス科学アカデミー会員。

- 1976 年、開成などへ通う東京東部の生徒さんたちからの要望により渋谷に移転してまいりました。以後は首都圏名門校の中高生のみならず週末には関西など地方の中高生が「一生モノの英語力」を求めて集ってまいりました。東大受験という枠を超えて国際社会で立派に通用する折り目正しい英語を、そして大人になってからも自ら英語力を伸ばしてゆける基礎（fundamentals）を、根本から学んでおります。

- 「一生モノの英語力」を身につけていく通過点として、中学生で英検 1 級、高校生で TOEIC 970 点以上（990 点満点）に達する方、高 3 クラスで偏差値が 40 アップする方もいらっしゃいます。大学受験では、東大・京大・一橋・東工大など一流国立大、理Ⅲ・医科歯科・慶應医・千葉医など難関医学部、早慶上智などトップ私立大に合格を果たし、医学部などの面接試験では「英語はどのように勉強されたのですか」とお褒めの言葉を頂戴しております。東大合格率は 80%以上を維持し、理Ⅲや文Ⅰに首席で合格される方もいらっしゃいます。

- 高校から、あるいは大学入学後に留学される方も多く、TOEFL で 110 点以上（120 点満点）、IELTS で 7.5 点以上（9 点満点）をとって、ハーバード、MIT、イェール、コロンビア、カリフォルニア大各校、オックスブリッジなど海外の名門大学（院）に進まれております。近年では、聖心女子学院出身の島戸さんが、高 2 の夏から United World Colleges インド校に留学し、トップの成績で卒業してロンドン大学医学部に進学されました。また麻布出身の羽場優紀さんが、東大からコロンビア大学大学院へ進学し、アメリカ人の同級生を抑えて最優秀修士論文賞を受賞、プリンストン主席、ハーバードトップ 3 名、コロンビア主席で博士課程のオファーを受けました。さらに国際数学オリンピックで銅・銀メダルを受賞している清原大慈さんが東大合格後まもなく数学専攻で MIT に進学し、近く物理学を専攻に加えてダブルメジャーとする予定です。

- 大学卒業後は、法曹界、医学界、学術界、実業界、官界をはじめ広く世界の第一線で「英語を使える社会人」として活躍されております。リウマチの仕組みを解明したとしてノーベル賞候補の登竜門とも言われるイギリスの *Nature* に論文が掲載された方、英国政府との若手官僚交換留学制度の第一期生に選ばれブレア元首相のもとで働かれた方、レム睡眠中の記憶忘却のメカニズムを解明し二十代ながら筆頭執筆者として論文が *Science* に掲載された方もいらっしゃいます。

▸▸▸ 巻末の「卒業生からのメッセージ」をあわせてご覧ください。

三つの教育方針

1. 人間教育

平岡塾は英語専門塾ですが、単に道具としての英語を学ぶだけの場ではありません。創立当初より半世紀以上、英語教育を通じて、生徒の皆さまが将来いかなる環境でも「幸せに生き抜く力」としての「持続力」「思考力」「判断力」「発信力」の育成に努めてまいりました。

自由と平等 ── 学びの場の基本

- 当塾は創立時から一貫して、塾生には他人に迷惑をかけない限り最大限の自由を許してまいりました。(授業中の飲食も自由です。) それによって塾生は臆することなく教師に質問をし意見を述べております。
- また、機会均等の精神により入塾試験はいたしません。学校指定制もとりません。クラス選択も自由で、習熟度に合わせて、いずれのクラスにもお入りいただけます。そのため小 6 生から大学受験生、大学生や大人の方も入塾されております。

自ら触れて自ら気づく ── 宿題の意義と効用

- 日本人がなかなか英語を習得できない大きな原因の一つは、英語に触れる機会が日常生活のなかで圧倒的に少なく、せいぜい週に数時間の授業中に限られていることです。しかも語学は実技でもありますので、ただ受動的に授業を聴いているだけでは上達いたしません。そこで当塾では、生徒さんご自身にたくさんの英語に触れる機会、そして自ら気づき自ら考える素材を提供したく、毎授業、文法・読解・作文の宿題をお出ししております。
- 英語は努力を裏切りません。「授業で学び、宿題を通じて考え、次の授業でその成果を発表する」という過程を反復・継続することで、英語力は着実に向上するのみならず、自己管理の大切さや「気づき・学び」そのものの喜びを知り、それがある種の成功体験つまりは内的な動機づけとなって、他科目の学習や社会生活全般においても好ましい効果が出てまいります。

互いに刺激し互いに学ぶ ──「場の力」を生みだす授業スタイル

- 器楽やスポーツの世界では、他者の実演・実践を観察することで多くのことを学び取ることができます。同じく「実技」である語学でも、他者のスピーキングや作文、和訳を見聞きすることで、「自分に足りない部分に気づき課題を発見する」ことができます。
- 当塾の授業スタイルは寺子屋(座卓) 式で、子供たちは互いに向き合い、隣り合って座っておりますので、周囲の子供たちの様子は手に取るようにわかります。そのような場のなかで、ある時期に飛躍的に上達して周りを驚かせる生徒さんが少なからず出てまいります。
- 私たちの長い現場経験から判断しますに、それは真面目に授業に出席して地道に宿題をこなしていたからだけではありません。毎週毎週の授業のなかで様々な生徒さんの「実演」すなわち「聞く/読む/話す/書く」を目の当たりにすることで、「自分に足りない部分に気づき課題を発見している」ためです。
- ネイティブ講師と一見スムーズに会話していても文法はかなり破格な帰国子女の方もいらっしゃれば、逆にスピーキングやリスニングはまだ不慣れでも、和訳や英作では講師を唸らせる立派な文章を発表する生徒さんもいらっしゃいます。つまり、それぞれに得手不得手のある多様な他者の存在が、学習者にとっていわば「成長への化学変化を引き起こす触媒」となっているのです。
- 幼児は同年代の子供の振る舞いに強い関心を示しますが、それは中高生になっても変わりません。学習意欲の高

い生徒に囲まれていれば自ずと影響を受けてまいります。ノートの取り方ひとつとっても然りです。当塾は英語を教える場ですが、子供たち自身が互いを見聞きし、そこから能動的に何かを学び取り、それを通じて自己を発見し、ひいては自律に目覚めるという、真の意味での「学びの場」が代々受け継がれてまいりました。

2. 日本語と教養の重視

それらの力を養うための根幹として「国語力」と「教養力」を重視しております。私共の長い教育経験から「豊かな国語力と幅広い視野の涵養なくして、真に実りある英語学習は望めない」と確信しております。未来ある生徒の皆さまを、耳触りはいいが成果に乏しい英語教授法の実験台にはいたしません。

● 思考言語としての母語と英語学習

- どのような世界や職業で生きるにしても、私たちは「思考する」ことをやめることはできません。私たちは言語を使って思考しますので、思考の深さや精緻さはその言語の語彙力や運用力によって制約を受けます。日本語で思考しているのであれば、日本語力を鍛えることが即ち思考力を鍛えることにほかなりません。英語を学ぶ・学ばないにかかわりなく、「思考する」という生きるうえでの根源的な精神活動を支えているのが母語=日本語であることをまず大切に心に留めていただきたく存じます。
- 「母語の獲得」と「外国語の習得」は本質的に異なります。私たちが膨大な時間をかけて母語を獲得した「日本語漬け」の環境と同じ条件を外国語の習得に際して期待することはできません。思考言語としての母語=日本語が定着し、それを用いた理解力と分析力が伸長しつつある中高生には、その日本語を介して「意識的に」英語を学び、日本語で論理的に思考しながら基本を定着させていくのが最も効率的かつ堅実な方法です。
- 日本語と英語の間を何度も行き来して、その差異に敏感になることでしか得られないさまざまな「気づき」がそこにはあります。これは相当に高度な知的な営みであり、言語学習の醍醐味でもあります。日々無意識に使用している日本語にも反省が加わり、日本語力すなわち思考力を鍛えることにもつながってまいります。
- 最近では、「オール・イングリッシュ」や「英語で英語を理解する」などと称して、日本語による文法説明や緻密な訳読といった教授法を軽視する風潮がございます。しかし英語と同じ系統の言語を母語とするならまだしも、英語と日本語とは語彙・音韻・文構造のあらゆる点で全く接点のない異質な言語ですので、日本人が「英語でものを考える」ようになるには、よほどの才能と修練がなければ困難でございます。

● 言語力を支える教養力

- 当塾でも「日本語力が頭打ちとなって英語力が伸びない」生徒さんがいらっしゃいます。教室ではよく生徒さんに「皆さんの英語力が母語である日本語力を上回ることはありません」とお話しいたします。ここでいう「日本語力」には、自分の意見や考えを適切な日本語で表現し伝えることはもちろんですが（アウトプット）、日本語による思考をつうじて知識を吸収し、教養として身につけることも含んでおります（インプット）。
- ある英語検定のスピーチ試験で「科学の発展は常に有益か」というテーマが出され、まったく対応できなかったという生徒さんがいらっしゃいました。日本語で考えたことがないこと、言えないことは、英語でも言えるはずはございません。英語でのやりとりにおいて、相手の意見や考えを理解するにも、また自分の意見や考えを伝えるにも、一定レベルの英語力が必要であるのはもちろんですが、しかしそれ以前に、日本語（思考）をつうじて知識を吸収し教養として身につけておくことが必要です。

- 幸いにして日本語は、自然科学から政治、経済、哲学、文学、芸術に至るまでの森羅万象を思考し論じうるだけの文法や語彙を有する言語、すなわち「国語」の名に値する言語体系です。母語で高等教育を完結できる国は世界でもまれであり、日本人がノーベル賞を取れるのは母語で深い思考ができるからだとも言われております。日本にあって多方面にわたる良質な国語を吸収することが教養を身につける一番の近道です。欧米人は、その人の教養度や自国文化への理解度をもって人物の信用度とするところがございます。たとえ流暢な英語でなくても、教養に裏打ちされた中身のあるメッセージを発すれば国際社会では評価されます。
- 皆様にはこれから中学、高校、大学をつうじて勉強する時間は十分にございます。保護者の皆様はご存知のように、お子様方にとりましてこの 10 年前後の期間は、「英語の基礎」どころか「人生そのものの土台」、すなわち後の生き方の基礎となる知見・信念・価値が形成されていく、とても大切な時間でございます。日本語力や英語力を伸ばすためという観点を超えて、人生をより幸福に、より豊かに歩まれていく一助として、ぜひとも幅広い知識・教養を身につけていただきたく存じます。

3. 音声と文法の重視

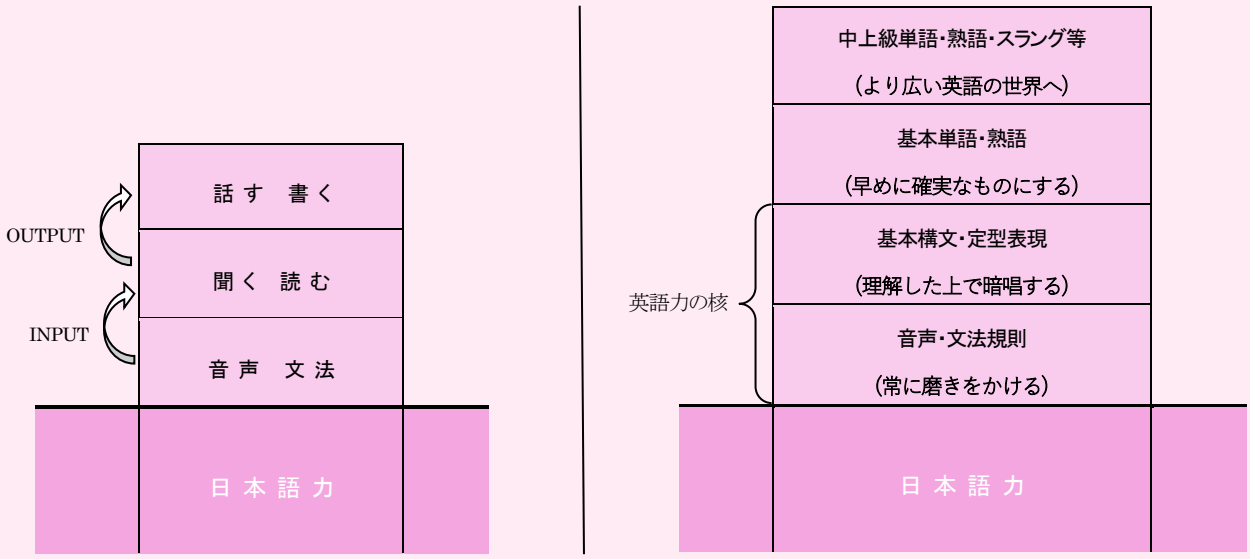
言語学習で四技能の習得を目指すのは当然ですが、その土台として、ネイティブ・スピーカーではない私たちが絶えず磨きをかける必要があるのが「音声」と「文法」です。これらを軽視したり、インプット（聞く/読む）とアウトプット（話す/書く）の学習の順序やバランスを誤ると、決して力がつきません。経験と実績に裏打ちされた堅実な学習法をご提供いたします。

● 英語力の核 ── 音声と文法

- 英語学習において最も大切なのはまず「音声」です。私たちは本来、あらゆる言語の音を聞き取る力を備えて生まれてまいります。しかし次第に脳は、慣れ親しんでいる母語の音だけを言語の音として取り込み、それ以外は雑音などとして処理するように構造化されてまいります。つまり英語の音は、日本語に慣れ親しんだ脳へは言語の音として届いていないのです。
- そこで英語の音を言語の音として脳に刷り込むことが必要になってまいりますが、この目的のために英語の音声を無暗矢鱈に聞くだけでは、初学者の脳はそれを雑音として処理するでしょう（もちろんそれなりの効用はございます）。そうではなく、まずは「自分自身で英語の音を出す」ことによって「英語は必要な言語の音である」ことを脳に刷り込むのです。そのうえで「聞く」ことをすれば効果は一段と高まります。単語の発音や文章の音読は英語学習の基本中の基本です。当塾では、授業中にあつかう教材の英文はすべて音読していただいております。
- 一方、言語を使うためにはその言語の仕組みを知らなくてはなりません。母語である日本語の場合は、その仕組みは意識されることなく身につき使用する際にも意識されません。しかし外国語の英語の場合は、その仕組みが意識されずに身につくことはございませんので、英語を使えるようになるにはその仕組みを「意識的に」身につけなければなりません。この仕組みのなかから英語を使うのに必要なエッセンスを取り出したものが「文法」にほかなりません。
- しかし「文法が身についている」ということだけでは、「英語が使える」ことを意味するわけではありません。英語を使うための「基礎ができている」ということです。英語を「聞く/読む/話す/書く」力を、自分一人で、（将来）いつでも、伸ばしていく土台ができているということです。それは「一生モノの英語力」を手にする第一歩です。

適切な学習バランス

- 下の図をご覧ください。思考を正しくアウトプットする（話す/書く）ためには、その土台として正しいインプット（聞く/読む）が必要です。そして、それら四つの力は正しい音声と文法に支えられてこそ意味があります。
- 闇雲にアウトプットばかりを練習しても、その土台となるインプットが不正確・不十分では空回りしてしまいますし、同様に、音声や文法が疎かなままインプットの量ばかりを増やしても、着実な成長は望めません。
- したがって、大切なのは全体の学習バランスです。当塾では全クラスをつうじて音声と文法に磨きをかけつつ良質なインプットを継続し、それぞれの学習段階に適した質と量のバランスに気をつけながら、徐々にアウトプットの水準を高めてまいります。
- 当塾がこれまで半世紀以上にわたり培ってまいりましたカリキュラムに沿って、無理なく、無駄なく、堅実に英語学習を進めていただければと存じます。



英語学習の指導方針

英語の習得においては「一を聞いて十を知る」頭の良さよりも、「一を聞いて一を確実に身につける」ひたむきな努力が大切です。英語は努力を裏切りません。器楽やスポーツと似ていて毎日くり返して練習すれば、どなたでも確実に力がつけられます。逆に、一定レベルに達したからといって日々の練習を怠ると、力はみるみる落ちてまいります。以下に英語学習の主要な 4 分野、「音声」「文法」「読解」「英作文」について、当塾の指導方針をご紹介いたします。それはいたってオーソドックスな学習法ですが、最も効率的かつ堅実な方法であると確信しております。

● 音　声 ── 発音　リズム　リスニング　スピーキング

- 英語の音は日本語に比べて遙かに数が多く、たとえば日本語の母音は「アイウエオ」だけですが、英語は長短あわせるとその 4～5 倍あります（分類法に応じて数は前後します）。また日本語では子音は母音と一緒にしか発音されませんが、英語では子音だけでも発音されますし、強く読むこともします。さらに日本語はすべて有声音ですが英語には無声音があり、それを有声音で発音しても通じません。
- 当塾では、最もベーシックなクラスである Ｊ１ の初回授業から、このような英語と日本語の音声的な差異を強烈に意識していただくために、ネイティブ講師がアルファベットの発音を一つ一つ丁寧に指導いたします。ひとたび誤った発音を身につけてしまうと矯正することは容易ではないからです。
- 音だけでなく英語は日本語とは違った「リズムとイントネーション」を持っております。この指導のために当塾で Ｊ１ の段階から採用しているのが *Small Talk* という教材です。これは、ジャズの演奏にあわせて日常会話でよく使うフレーズを「唱える（chant）」ものです。音楽のリズムを利用して英語独特のリズムとイントネーションが体得できると同時に、日常会話の多様な表現がスムーズに身につくように工夫されております。もちろん、これは聴き取る力を養うことにも直結しております。音声は、自分で発することができて初めて聴き取ることができるからです。
- ネイティブ講師はまた読解用教材を用いて読みの訓練を指導いたします。発音とイントネーションを矯正しつつ英文の調子を身につけます。その際、生徒に5W1H（誰が、何を、いつ、どこで、なぜ、どのように）の質問をして即座に英語で答える訓練もおこないます。語や句の形で返答するのではなく、質問の内容に応じた、文法的に正しい、文の体裁を整えた形で答えていただきます。頭で理解している文法を状況に応じて正確にアウトプットする回路をつくるのが目的です。文法を強く意識しつつも同時に英文を正確に発声するスピードを速めていく訓練です。こうした訓練を繰り返すことで文法はしだいに無意識化されてまいります。
- なお、ネイティブ講師がレッスンを担当している時間は、日本語は一切使用しません。生きた会話のやりとりを身につけていただくため、講師と生徒、また生徒同士のやりとりは英語でおこないます。そのほかネイティブ講師のレッスン内容につきましては、別途にご説明申し上げます。（▸▸▸ pp.9-10 の「OC CLASSES」をご覧ください。）

● 文　法

- 先にも申し上げましたが、外国語としての英語を使えるようになるには、英語の仕組み、すなわち「文法」を身につけることが必要です。そして身につけた文法の知識を実際の「聞く/読む/話す/書く」で活かせるようになるには、繰り返しの練習が大切です。
- 当塾では、Ｊ１ の初回授業から2年弱で英米人が普通に生活するのに必要な基本の文法体系を学んでしまいます。通常は中高6年間かけて学ぶものですが、学ぶべき文法の全体像を早期に示すことで安心感を持っていただくと同時に、その文法に則って「聞く/読む/話す/書く」力を養うことに多くの時間を割くことができるからです。簡単な内容の例文を使えば、中学低学年でも仮定法などの構文も理解していただけます。たとえばＪ１の４月に取り入れる読解教材『ドン・キホーテ』では早くも関係詞、不定詞、分詞、過去完了まで出てまいりますが、当塾の講師は難解なものほどシンプルに説明いたしますので、子供たちはスムーズに対応しております。もちろん、文法の系統的な学習はＪ２で終わりということではございません。卒業するまで密度を高めつつ何巡も繰り返してまいります。

- 当塾では、新しい文法項目を教える際に塾オリジナルの文法解説プリントを使用いたします。プリントの束をあらかじめ配布しておくのではなく、授業で新しい文法項目を教えるたびごとに「平岡プリント」を配り、生徒は解説された補足事項をそれに書き込みます。そして、これらのプリントを各自ファイリングし、「自分だけの文法集」を作ってまいります。この平岡プリント集はＪ１から大学入試特別対策クラスまで毎回授業に持参し、宿題の答えあわせをするなかで忘れている文法事項が見つかり次第、クラス全体でこれに立ち返って再確認し、理解と記憶の定着を図ります。
- そして配布されたプリントにある基本例文をその日の授業中に、あるいは次回の授業までに暗記し、教師の前で一人一人口頭で発表します。（「お帰り問題」と呼んでいます。）Ｊ1～Ｊ２の期間はこの形式でお帰り問題を行いますが、Ｓ１から入塾される方は筆記方式で行います。
- 解説された新しい文法事項について宿題が出されます。解説を聞いただけでは身につきません。実際に自分で練習問題を解くなかで理解が深まり定着します。類似の問題が重なると「こんな問題、もう考えなくても解けるよ」というやや不満めいた声が生徒から漏れますが、これこそがまさに私共の狙いです。何題も反復して解いたからこそ「もう考えなくても」という域に達するのです。「日本人は文法を気にしすぎるから英語が使えない」と言われますが、そうではなく「文法が気にならなくなるまで身につけないから使えない」のです。

● 読　解 ── 短文　長文　原典講読

- 当塾では、Ｊ１より Oxford の原書を読んでいただきます。英米人が書いた本物に最初から慣れ親しむ必要があると考えるからです。Ｊ１の４月末から読解教材『ドン・キホーテ』を取り入れ、Ｊ２で『八十日間世界一周』を終えた後、Ｊ３からは「短文」「長文」「原典講読」という形式で読解力を多角的に養成してまいります。（宿題として B4 用紙1～2 枚。）
- 短文では文章の一文ずつ文型、品詞、要素などを細かく解析して「文法的に精確に読む」訓練をいたします。この訓練は、将来的に「大量に早く正確に読める」ようになるために避けて通れません。「大量に早く正確に読める」にはできるだけ「文法が無意識化されて」いなければなりません。そうするには「文法的に精確に読む」という作業を反復して文法の「型を体に染み込ませる」のが最も確実な方法です。「文法は文法問題を解くよりも生きた文章のなかでこそ身につく」と言われるのはそのためです。
- 高校生にもなると生徒は「速読」の仕方を教えて欲しいといいますが、残念ながら「速読」の手っ取り早い方法などございません。高校生がＪ１の『ドン・キホーテ』を速読できるとすれば、それはストーリーが単純で単語が平易であることのほかに、文法を意識せずに読めるからです。何か特別の速読の方法を用いているからではございません。たとえば「英語では疑問文は主語と動詞の順序が逆になる」といった文法規則はもはや一々意識されません。すでに体に染み込んでいるからです。
- 速読に関連して申し上げますと、当塾で徹底して訓練しているのは、英文を「前から前から読む」ということです。たとえば Tom was absent from school yesterday because he was ill.は「トムは欠席した、学校を、昨日、病気だったので」と読んで十分に理解できます。和訳の試験問題でもない限りわざわざ「トムは昨日病気だったので学校を欠席した」にして読む必要はございません。後に関係詞節や時や理由の副詞節が続いていると、日本語的な語順に引っ張られてそちらから先に読もうとしますが、混み入った長い英文になるとお手上げです。英文をその語順のままに（つまり書き手の思考の流れに沿って）読んで理解できるようになって初めて本当に英語が読めると言えます。「速読」ができるようになるには、まずこの「前から読む」習慣を身につけるのが第一歩です。
- 一方、長文では「文脈を踏まえて読む」ことに重きを置きます。年長クラスになると小説でも評論でも内容が高度になってまいります。すると「全体として何を主張しているかが分からない」という声を耳にします。その原因は第一に、ある一文を訳し終えると、いま訳したばかりの文の内容を踏まえないで次の文を訳し始めるからです。いいかえますと、英語を日本語にただ「変換する」作業に没頭しているためです。一文一文の間には「対立」「因果」「列挙」「換言」など様々な関係性がありますので、それを踏まえ予想しつつ読み進めないと全体の主張は見えてまいりません。そして第二に(こちらがより根本的なのですが)、「何が語られているのだろう」という好奇心・問題意識をもっ

て読んでいないためです。それを養うものとしてやはり「思考力」「日本語力」「教養力」が大切となります。

- なお、当塾で取り上げる読解教材は、オスカー・ワイルド、オルダス・ハクスリー、ジョージ・オーウェル、サマーセット・モーム、バートランド・ラッセルなど、音調・修辞・内容の点で昔から定評のある作家たちばかりで、欧米で一流の知性、一流の英語とされております。比較的平易な語彙や構文を使い、明快ながら力強くも格調高い英文は、優れた読解用教材であると同時にそっくりそのまま英作文のお手本にもなります。さらに、ルネ・デカルトの『方法序説』(英語版)、ラッセルの『教育論』や『文化・政治論』、オーウェル『動物農場』はすべて原書で読みますので、是非、「思考力」を鍛え、「教養」を身につける機会としていただきたく存じます。

● 英 作 文 ── 和文英訳　パラグラフライティング　エッセイライティング

- 前段で「ネイティブ講師と一見スムーズに会話していても文法はかなり破格な帰国子女の方もいらっしゃれば、逆にスピーキングやリスニングはまだ不慣れでも、和訳や英作では講師を唸らせる立派な文章を発表する生徒さんもいらっしゃいます」とご紹介いたしました。この後者のタイプの方は、このまま練習を続けていけば、確実に話せるようになり聴けるようになってまいります。書ければ話せます(その逆は必ずしも真ではありません)。話せないのは書けないからです。
- 「書けない」ということの意味は、話したいことを「文章化できない、文章として書けない」ということです。話せるようになるために、どれだけ会話の練習をしたりネイティブの英語に触れても、文章化の能力を鍛えることにはなっておりませんので 話せるようになるのは困難です。そしてこの「文章を書く」ということは、「語句を規則に従って配置する」ことですので、「文法」が必要不可欠となります。また中身の伴った「話したいこと」が芽生えるもとは「教養」でございます。
- さて、当塾では英文を書く訓練については、大学入試特別対策クラスに進むまでは「次の日本文を英語で書きなさい」式のいわゆる和文英訳が中心です。英語の偏差値が 70 を越える生徒さんでも 3 単現の s を付け忘れたり、複数名詞をit で指したりいたしますので、英語の実力は英作文で如実に現われますと同時に初歩的つまり重大な弱点が見つかる機会ともなります。
- この和文英訳で見られる種々の誤りは主に、「与えられた日本語をそのまますべて英語に移し替えようとする」ことから生じます。日本語と英語とでは表現形式が異なりますので、どんなに文法的に誤りが無くても、ネイティブが日常生活で使わない表現であれば正しいとはいえません。和英辞典を頼り単語を文法どおりにつなぎ合わせても、自然な表現は生まれません。
- そこでおこなうのが「和文和訳」です。つまり、そのままでは英訳しにくい日本語を英訳し易い日本語に言い換えることです(paraphrase)。この「和文和訳」ではすぐれて日本語力が問われます。「日本語は英語と比べて情緒的で余分な言葉が多く、また文脈全体で意味を伝えようとするが、英語は 1 文 1 文の意味が明確でなければならない」といったことも英作では大切な予備知識となります。

  例)「最近の学生は<u>意思決定力が弱くなった</u>」→「最近の学生は<u>優柔不断になった</u>」

  Students today have <u>become indecisive</u>.
- 大学入試特別対策クラスでは、入試に備えて少し長めの英文を書く訓練もします。パラグラフ・ライティング(50～100 語くらい)とエッセイ・ライティング(100～300 語くらい)がそれです。これらは日本語の段落や随筆とは異なり、「主張→理由→結論」や「序論→本論→結論」といった一定の形式に厳格に従った、論理的に構築された英文を書くことを求めています。

  例) Should we experiment on animals in order to develop products such as medicines that human beings find beneficial?　Write a paragraph explaining your opinion. (早稲田大)
- こうした問題形式の意図するところは、基礎的な英語力とならんで、広く国際社会で要求される自己表現力や論理的思考力をはかることでございます。当塾では、ネイティブ講師と日本人講師が協力して問題演習を行い、添削と書き直しを繰り返してまいります。
- もっとも、これらの問題が採点される際は、まずは基本的な文法や語彙の力があるかどうかがチェックされますので、まずは和文英訳式の短い英文をきっちり正しく書けること、つまり文法力や語彙力に裏打ちされた英作力を養っておくことが必要でございます。そして、ある程度の長さの英文を書く大前提として、日本、環境、科学、政治・経済、医療、比較文化、教育などのテーマについて日頃から思考し、自分の意見をまとめておくことが欠かせません。

OC CLASSES

講師: リチャード・ネデルコフ MA ELT（東京藝術大学音楽学部・言語芸術学科講師）

総合目標: ***F = FUMES²***

Fluency = (Freedom + Understanding + Motivation + Experience + Structure) ²
流暢さ=（自由 ＋ 理解 ＋ やる気 ＋ 経験 ＋ 構造）²

Term	Definition
Freedom	Practice within minimal structural constraints 最小限の模範的な英文を示して会話練習する
Understanding	Grammatical comprehension & awareness of pronunciation “rules” 文法と発音の規則を理解する
Motivation	Havin’ fun! (but always with some specific purpose or function as an aim) とにかく楽しむこと！(ただし、常に目的意識を持つこと)
Experience	Just doin’ it! (task-based language production) とにかく話す! (課題に合わせて文を作っていく)
Structure	Practice within a given structure to enhance linguistic competency 英語の力を伸ばすために、与えられた構文を使って練習する
²	Repetition (while avoiding tediousness!) とにかく反復する（ただし、退屈にならないように）

— 反復は記憶力と熟達の母なり —

J 1　教材: *Don Quixote / ドン・キホーテ*（セルバンテス）
Oral Communication Lessons, Dialogs & Drills I

J 2　教材: *Around the World in 80 Days / 80 日間世界一周*（ジュール・ヴェルヌ）
Dialogs & Drills I, Oral Communication Lessons

J 3　教材: *Animal Farm / 動物農場*（オーウェル）
Dialogs & Drills I, Oral Communication Lessons

S 1　教材: *Dialogs & Drills I*
Oral Communication Lessons

S 2　教材: *Dialogs & Drills I*, *Dialogs & Drills II*
Oral Communication Lessons, *News Listening*

M 1　教材: *1984*（オーウェル）
Dialogs & Drills II

M 2　教材: *Brave New World / すばらしき新世界*（ハックスリー）
Dialogs & Drills II, News Listening

大学入試特対クラス　教材: Tokyo University mock/past exams, *News Listening,*
Dialogs & Drills III, paragraph & essay writing, E-Writing

● ***SMALL TALK***　（*Oral Communication Lessons* 所収）

- スモール・トーク（small talk）とは「世間話」や「雑談」を意味しますが、本教材は、一般的なアメリカン・イングリッシュの日常会話をジャズのリズムに合わせて唱えることで、口語アメリカン・イングリッシュにおける抑揚、およびリズムパターンを正しく認識させるために開発されました。

- 区切られたジャズ特有のビートやテンポは、言葉のアクセントやリズム、さらにはそこに込められた感情を、実に多様に印象深く伝えることを可能にします。また抑揚パターンは、言葉を発する話し手の意図や感情を表現するために必要不可欠な要素です。そこで、これらを習得するための革新的で画期的な方法として *Small Talk* が産み出されました。
- この訓練では、日常会話で使われる表現をジャズの音楽に合わせて積極的に発声するエクササイズを行い、聴き取りづらい子音や母音を、対比しながら識別することをめざします。

THE SOUNDS OF AMERICAN ENGLISH

- 口語のアメリカン・イングリッシュでは、発声されるはずの音が、間延びしたり、縮まったり、混ざり合ったり、時には省略されることすらあります。これらの微妙な特性を習得することは、きちんとした言語学(母国語)教養を持ったネイティヴ・スピーカーから自然な会話レッスンを受けるか、特に聴き取りの力を十分につけている場合以外は、生徒達にとって大変困難な作業です。
- 例えば、"Jeet yet?" という音は、実はそれが "Did you eat yet?" というセンテンスを発声したものだという理解がないかぎり、つまり、リスニングをきちんと習得していないかぎり、そこに何の意味も見いだせません。また別の例として、音を混合させてしまうケースもあり、例えば "I'm going to..." を "I'm gonna..." と発声することがあります。
- *Small Talk* は、このような会話の言葉と書き言葉の違いを理解する手助けとなり、とくに聴き取りの力をつけるために役立ちます。

DIALOGS & DRILLS

- 本書は、語彙と流暢さを養うエクササイズをスキル別に三段階に分けて、英語能力と日常的な英会話力をつけるための教材です。
- 内容は、口語表現や慣用句(とくに前置詞句を使った言い回し)、すなわちあらゆる状況に応用のきく、典型的な、記憶し易い言い回しなど、一般に常用されている英語に的を絞っています。
- 毎回行われるレッスンで、模範的かつ即興的なエクササイズを行い、習ったパターンや語彙を使いながら、練習を重ねます。
- シリーズの Volume I は、英語の構造や文法への理解がまだごく限られている生徒を対象とします。過去に学習した内容を確実に吸収し、同時に、英語の自然なリズムと流れを感じとる感覚を育てるためには、広範囲にわたる口頭練習を必要とします。現代的で日常的な語彙を使って基本的な構文を紹介しています。
- Volume II は、語彙の拡張と、英会話の自然さや滑らかさを集中的に学習する必要のある中級レベルの生徒を対象とします。広範囲に渡る慣用句、口語表現のしかたを紹介しています。
- Volume III は、現代口語表現を正確に使える上級の生徒が更にスキルアップを図るための内容です。

NEWS LISTENING

- これは、英会話で頻繁に使われる語彙や文法的な構造パターン、さらには慣用句などを使った英語らしい言いまわしを、レベル別に分けている教材です。
- 現代的かつ日常的な言いまわし、構造パターン、語彙を、ニュースを使ったシンプル(軽いという意味ではなく)な方法で、広い範囲にわたって紹介しています。これらのニュース・ストーリーは、生徒達が興味を持て、また実際に応用できる内容を基にしており、あらゆる分野から選択されています。
- このシリーズは、英語の基礎は身についているが、口語英語を十分に訓練しておらず、したがって自信がついていない生徒を対象としています。したがって、レッスン教材は、日常会話に頻繁に使われる語彙レパートリーを、トピックを使って紹介しながら、きわめて重要な文法を見直せるようにデザインされています。

卒業生からのメッセージ

島戸麻彩子さん　ロンドン大学医学部在学

平岡塾で培った英語力は、留学先でも大いに役立つことを痛感する日々でした。たとえば、英語の最終成績を決定するテストの一つに、オーラルのテストがあります。エドガー・アラン・ポーなどの小説の一部分が出され、その内容を分析して、修辞法や作者の意図について15分間話すというテストです。欧米の生徒でも『こんな古典的な文章は読んだことがない』と悲鳴をあげていました。けれども、私は平岡塾でデカルト、ラッセルなど、難解な教材を読みこなしていましたから、十分に対応することができました。言語を文法的に分析し、把握する平岡塾の教えの威力は絶大だと感じました。

羽場優紀さん　プリンストン大学博士課程在学

アメリカでは、大学教授をはじめとするネイティブ(母語話者)の人たちに、「君はなぜそんなに英語が上手いのか」と言われました。発音も平岡塾のネイティブ講師による授業で鍛えられましたが、私の英語を本当に上手いと感じるなら、それは何よりも私が英語独特の「間」や「表現」を掴んで話せているからでしょう。非ネイティブだからこそ、ネイティブが無意識に用いている文法構造を突き詰めて学ぶことで、「間」や「表現」に対する感覚も研ぎ澄まされ、ネイティブ以上に英語の全体像をつかむことができます。

清原大慈さん　マサチューセッツ工科大学在学

英語という言語の構造を徹底的に頭に叩き込んだことで、英語の「揺るぎない基礎」が身につきました。この基礎があったおかげで、数学オリンピックでは海外の選手たちと臆することなく会話や議論を交わすことができましたし、MITに入学してからも、専門用語などは別として、英語自体で苦労することはほとんどありませんでした。文法に関しては何年間も繰り返し勉強しているので、絶対的な自信があります。文法はネイティブよりも間違いなく詳しいという自負がありますし、どんなに難しい英文でも読めるという自信もあります。平岡塾で学んだことは、僕の英語の絶対的な支えになっています。

高柳広さん　東京大学大学院医学系研究科教授

研究者を目指す人ならば世界に発信していく力を持つという意味でも英語力は絶対に必要である。しかしそれだけにとどまらず、論文のように他者に読ませるための英語は文法的に正しく書けることはもちろん、面白く書けることも大切だ。論文の執筆などでオリジナリティのある英語表現に頭を悩ませるたびに、「あなたは何がやりたいの？」「あなたしかできないことは何なの？」という平岡先生の言葉が胸をよぎる。実際、平岡塾の卒業生の多くが世界で活躍している現実があるのだから、先生の考えの正しさは証明されているはずである。「言うべきこと」がなければ語学には意味がない。また「伝えるべきなにか」がなければ言葉は生きない。

平岡塾

〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町5-2　TEL 03-3463-7535